

戦後復興期の北九州地方における企業運動部の研究

(1945～49年の硬式野球部について)

仲 里 清
堀 内 担 志
古園井 昌 喜

1. はじめに

八幡製鉄所硬式野球部を戦前における北九州地方の企業運動部の源流と位置づけ、その内実について、すでに考察している。¹⁾ その中で、特に、明記しなければならないのは、戦前の創部以来、企業運動部（ここでは硬式野球部をいう）が、部運営費用の大部分を対外試合による有料の入場料に依存している点である。当時の中島鑛業所（飯塚市）、門司鉄道管理局（門司市）、八幡製鉄所（八幡市）の硬式野球部についても、この点は一致している。さらに、重要な論点として、アマチュアリズムを標榜する企業の野球部が、現実的には有料試合（年間30～50回）による入場料を主な部の運営費や一部では個人収入に当てていたという内実が囁かれていることである。つまり、アマチュアのスポーツのセミ・プロ化は、すでに戦前において始まっていたと考えられる。このような傾向は、北九州地方に限定されるのではなく、企業運動部の生成期には、各地に生じたと予想される。ところで、日本に職業野球連盟が結成されたのは1936年（昭和11）2月5日である。²⁾

これ以後において連盟の綱領規約が制定され、制度としての機能を発揮しはじめる。したがって、それ以前にはプロフェッショナル・スポーツとしての野球は、公認されていなかったことになる。このような日本の野球をめぐる状況下にあって、現実的には、各地で開催されるアマチュアの硬式野球の有料試合に関する収支は不透明な部分が多く、これはプロ野球発足以前の過渡期におけるアマ野球界が抱える極めて曖昧な問題点といえるであろう。本論文の前提として、以上のような状況をあげておかなければならない。

また、同地方の硬式野球部が創部された当時の社会的背景も考察する必要がある。すでに論及した八幡製鉄所野球部を除外し、中島鑛業所、門司鉄道管理局の両野球部の戦前における内実について第2項で述べる。

さて、本論文の目的は、戦後復興期に他の地方に比較し、北九州地方が抜群の迅速さをもって企業の硬式野球部が活動を再開することを可能にした諸条件の解明である。

しかし、そのためには、若干の補足的説明が必要と考えられる。

戦前において、北九州工業地帯には若年男子労働者を中心とする人口集中化が始まり、結果的には、八幡製鉄所を核とする国内植民型ともいえる不特定多数の人々の集散地帯となる。このような労働事情の中で、大企業を中心とする労働者側は、単純な労働を継続するだけではなく、日常生活の中に何かの潤いを求めるのは当然のことである。その意味において、大企業の経営側が、福利厚生の一環として労働者への娯楽提供などを考慮せざるを得なくなる。そこで野球のもつ種々の特性が着目される。視覚や聴覚に訴えやすく初めて観る人には比較的単純で理解しやすい。攻守の切替えが明確で、一種の間（時間的余裕）があり、その時間を利用できる。ナインの連携を通してチームワークを重視し、協同の精神の養成を啓蒙するには適した特性がある。見せるという観点からすれば、観客数の収容規模が、他のスポーツに比較し大きいなど、スポーツの大衆化には野球が最適である。結果的には、多くの野球ファンを増やし、硬式野球の魅力を通して、野球が地域の文化として醸成されるという伝統を有したといっても過言ではない。戦後の異常なまでの迅速な野球の復興には、このような地域的特性、つまり野球に対する熱狂的な素地の熟成を看過することができない。前述のように八幡製鉄所野球部については、創部の時期は、後発ではあるが、企業経営への間接的影響は大きく、野球の持つシンボル性が、いかに企業自体の士気高揚や帰属意識を向上したかが明らかにされている。戦前の企業運動部の意義を明確に誇示した典型例といえる。同所の企業運動部（＝同所野球部）を北九州地方の源流と位置づける所以である。同所野球部は、1927年（昭和2）8月3日から神宮球場での第1回都市対抗野球大会への地域推薦に漏れ（推薦出場したのは門司鉄道局と福岡九州鉄道の2チーム）、翌年に、正式の予選大会を勝ち抜いて全国都市対抗への出場権を獲得し、本大会で東京クラブと対戦し敗退する。この結果は、ライバルの門司鉄道局に好影響を与え、同年から両者による定期戦が開始される。所謂、北九州の早慶戦とまで称された製・門戦によりファンが急増する。1936年（昭和11）8月、第10回都市対抗で門司鉄道局、翌年に同大会で八幡製鉄所が連続優勝する。しかし、1942年（昭和17）の第16回が戦前の最終大会となり、翌年から昭和20年までは、戦争のため中止となる。戦後は、1946年（昭和21）8月に第17回として再開され八幡製鉄所が出場している。しかし、終戦後の企業運動部の中心的存在であった硬式野球界は、大きな転換を求められることになる。それは、結論的にいえば、1949年（昭和24）11月26日、日本野球連盟が2リーグの分立を公表し、両リーグは支配下選手の供給源を都市対抗に出場する優秀な選手に求める。企業に所属する選手が大量に引き抜かれるという事態に遭遇する。中でも、その影響を全面的に受けたのは九州の企業チームである。戦時中、一時中断された野球は、1945年秋以降に開始されたGHQ（連合国軍総司令部）の「戦後改革」により、早期に解禁され、むしろ戦後復興の波に乗りながら全国的に普及する。前記の製・門戦復活は実に早い。

1945年11月、八幡大谷球場で軟式（硬球がないため）で举行されたが、超満員の観衆と選手・関係者は平和の歓びを共有することになる。しかし、戦後復興期の硬式野球部に関する資料は殆ど残されていない。いわば空白期である。前述のGHQが、日本での印刷・出版物の事前検閲を実施したのは、1945～49年にかけてだが、検閲のため提出された膨大な量の出版物は、当時のGHQ参謀のG.W.プランゲ氏が帰任の際、米国に持ち帰り、メリーランド州立大学で一括保管する。これを「プランゲ文庫」と略称している。同文庫の雑誌関係分は、1997年10月以降、マイクロフィルム化された雑誌約13,000タイトルが公開され、現在、日本の国立国会図書館で閲覧が可能である。当初、占領軍による日本への検閲制度に関する研究資料として評価されたが、最近では、当時の社会、スポーツ、生活、文化などの諸相を反映する資料として再認識されている。戦後の数年間に限定すれば、日本で出版されながら、その多くは散逸し、資料として入手できるものは殆ど残されていない状況を考慮すると資料的価値は高い。以上からスポーツに関する資料として着目し、戦後復興期における北九州地方の企業硬式野球部を対象に、同文庫から関係資料を検索・抽出し、下記の雑誌資料を収集できた。

- ①西日本球界、新関門社刊、1947～48年、1巻1号～17号、フィルムコマ数280。
- ②スポーツマガジン、下関スポーツ社、1948年10月、1巻6号、同上数27。
- ③新太洋、太洋漁業職員組合、1947～48年の2～18号など、同上数69。
- ④青年時評、八幡製鉄労組職組青年部、1946年5号～13号、同上数56。

以上により、第3項で当時の北九州地方の企業硬式野球部の内実を明らかにする。

2. 戦前の硬式野球部と社会的背景

(1) 中島鑛業所

1920年（大正9）、同所は本部事務所を飯塚炭鉱（現嘉穂郡穂波町平恒）に置き、従業員厚生施設（病院・集会所・運動場等）を設置する。その年の従業員数は、飯塚炭鉱だけで6,000人を超えている。当時の同所の営業方針は徹底的な自社炭自売法式をとり若松、大阪、東京に支店を持ち、輸送基点となる神戸、門司に出張所を設け、坑内外の設備を近代化し、大手の三井田川、三菱鯉田に次ぐ出炭量を確保できるまでに成長する。しかし、これらの業績を支える労務管理制度は、前近代的な納屋頭制度への依存という非合理性があり、会社組織の秩序維持には納屋頭制度自体を支配下におく必要があった。もともと、飯塚炭鉱付近は、親分や納屋頭の勢力争いが激しく、労働力確保による坑夫の争奪や出入りからむ紛争が絶えず会社経営に支障があった。⁴⁾このような殺伐とした暗いイメージの払拭には、人の和をはかり明るい雰囲気醸成するスポーツを奨励し、地域の人々の融合の機会を多くするよう献策したのが駒山伴蔵（経理部長）である。社宅居住従業員の子弟のために約5,000坪の運動場を敷地内（現平恒小学校付近）

に造成する。開場式には付近の中学校野球部を招待してゲームを従業員に見せる。その後、駒山を部長として社内の同好者による野球部が結成されたが、対外試合での勝利を望めるようなチームとしての戦力はなかった。同所社長中島徳松は、従業員に健全娯楽としての野球が次第に普及し、地域の気風刷新に充分機能し得ることを見定めながら、一方では新しいイメージによる会社の宣伝を意図する。それは、野球技能に秀でた人材を求め、中央球界との接触によって可能となる。翌年の夏、運動場を野球場に改造し、その開場式に市岡忠男^{注1)}(1891～1964)を招待する。市岡は、その時の印象を「上役の方が、體育に理解を持ち、之を善導せられるので、チームは非常に強く～略～」⁵⁾と述べている。その後、彼は、大正11年(1922)1月、同所に20日間滞在し基礎的技術の指導を行う。市岡は、当時の実業団と大学野球部との戦力の相違を次のように分析する。「実業団チームが勃興して、予選大会に於いて(1921年の第5回極東選手権大会予選)、大学チームと実力を争うに至った事は、野球技の普及を物語るものである～略～実業団チームにも、大学時代の選手が加入して、強いチームが可成り出来てきたが、猶実際の強味は、大学チームに及ばない。～略～純粹の商売人チームならずとも、せめて、半商売人チームが出来て、毎日練習したならば、大学チーム以上のチームはさしたる困難なくして出来るのである」⁶⁾と。この見解は、大正10年6月に発表されたが、実業団チームは練習時間が確保できず、仕事に従事しながら週に1～2回の練習では大学チームに勝ち目はないと断言する。また、良い指導者を得て、チームの中心となるような傑出した人物が育成されて、はじめて新興勢力になるとする実業団野球に対する改善策を提起する。彼の改善策は、中島鑛業野球部で具体化される。翌年発表した「運動王国九州」で、野球選手の執務法についてふれ、「中島鑛業所では、シーズンになると、野球選手に、朝早く出社を命じ、事務をとらせる代りに、午後二時には退社させる。これは、実業チームとしては、最も、いい方法だと思う」と。⁷⁾これは、先の見解が理解され、自己の理想実現を評価したものである。当時の日本野球界における実業団チームの中で、これほど明確に外部に対して勤務条件を公表した例は見当たらない。当時の実業団チームで最強とされた大阪毎日新聞野球団^{注2)}では、選手には一定の仕事を与え、野球の手当は一切受けていないと外部には公表しておきながら、それはあくまで建前であったという証言⁸⁾でも明らかなように、その内実については常に不透明な点が多い。その後、市岡は、中島鑛業所の一員として名を連ねたが、地元での試合に出場した記録は現在見当たらない。1923年3月の第3回全国実業野球大会(於、寝屋川グランド)で2試合に出場した記録は残っている。ここで、同年3月、入社と同時に主将として活躍した井土敏慧にふれなければならない。早稲田大学卒業後、東京芝浦電気に入社したが、地元の東筑中学出身であり市岡の後輩になる関係もあって中島から招かれ帰省する。井土は、恩師安部磯雄の薫陶を受け、野球部の信条である三つの訓戒を中島鑛業所の部員の合宿生活に活用する。それは、他人への配慮(迷惑をかけない)であり、シーズン中は健康上禁酒を守り、選手としての品格(球場における態度とフェアプレー)の養成である。市岡は、チームが強くなった理由は厳しい規律と各自の

摂生によるが、選手としての井土の存在が大きく、その影響がチームカラーに反映していると強調する。

中島を中心とする首脳部は、野球のもつシンボル性を重視する。当時、野球場を所有する企業は全国的にみても少なく、スタンドも一部には屋根があり、外野も柵で仕切り、約3,000人は収容できる本格的球場である。⁹⁾ 合宿所は球場に隣接し、食堂、スチーム仕掛けの浴場、衣類棚（現在のロッカー）、用具保管の縁側（バットが30～40本）、応接室及び3人で使用する部屋（寝室）があり、施設としては恵まれたものである。

合宿に入れたのは、部員40名中10数名の招かれた大学出身者が中心である。中島は、高給をもって有名大学選手を招く。例えば、渡辺大陸獲得には次のような経緯がある。大正10年（1921）11月8～9日、大毎野球団を中島球場に迎え、2連敗する。この試合を観戦した後、勝つためには投手力の強化を要請され、明治大学の投手として活躍していた渡辺を説得し入団させる。1923年6月28日に再び中島球場で対戦し、渡辺の力投で勝利する。中島の「やる以上負けるな、日本一の野球団をつくれ」¹⁰⁾ という気概は、筑豊炭業界の新興勢力を統率する強烈なリーダーシップから派生するものである。彼の野球に対する言説は見当たらないが、野球の持つ新鮮な魅力に関心を示し、地域住民の閉鎖的な思考様式に大きな影響を与えたのではないかと考えられる。当時の大衆娯楽としては、古臭い芝居や伝統的祭礼行事程度ものしかなく、それに満足しない人々は、その頃から流行しはじめた西欧活動写真の映像を通して自己の近代化像をオーバーラップし、次第に外来文化を意識し始めている。このような時代の趨勢は、野球という一つの文化を吸収するに時間はかからなかった。当時、選手兼マネージャーの馬場清二は、「いつもよい試合を見る機会に恵まれた筑豊の野球ファンの眼はいつとなく非常に肥え、これが筑豊一帯の実業団野球を生み、学生野球を刺激した～略～筑豊のファンは既に三十数年前、今日のプロ野球に匹敵する大試合を、中島野球団によってふんだんに見せて貰っていた訳である」¹¹⁾ と表現する。また、木原優氏（直方市感田在住、門司鉄道局投手として第5回全国実業団大会に出場）は、大正11年（1922）12月6日、中島球場での大リーグ選抜^{注3)} と中島鑛業との試合を観戦した印象を、「私は、直方から自転車に乗って見に行った。アメリカチームのメンバーは記憶にないが、当時本塁打王と言われたケリーが一塁を守っていた。本塁打が三本グラウンドの外の田圃に打ち込まれた。そのすごい打力に目をみはったのは私ばかりではない。試合は全く一方的で面白くなかったが、本場アメリカの野球を見て、日本の野球との格差があまりにも大きいことに驚いた」と。^{注4)} この選抜チームは、飯塚から下関に引き返し、同日夜、関釜連絡船で京城に向け出航する。翌年は、日本運動協会^{注5)} と対戦する。7月22日（於、中島球場）、23日（於、佐賀師範運動場）、25日（於、直方球場）と3カ所に移動し対戦し、中島の1勝2敗に終わる。しかし、中島鑛業の存在は、僅か4年間の短期間ではあったが、企業運動部の一つの方向性を示唆したといえる。1923年の秋には、最初の東京遠征を予定したが、関東大震災による大被害によって実現できなかった。この時、読売新聞社が企画した大学チームとの

対戦は、すべて有料試合で同社の宣伝によって前売券を販売した。しかし、東京遠征は中止となり、これを機に中島の首脳部は一気に野球から撤退する。1922年は、第1次大戦後の一時的な好景気の反動が深刻化し、石炭産業界不況のための全国的出炭制限が行われ、営業成績は低下の一途を辿る。中島鑛業も例外ではなく事業を縮小せざるを得ない状況となり、2年後の8月22日をもって三菱鑛業株式会社に事業一切を委託し、経営は三菱鑛業に移る。以後野球部を組織せず、野球場は従業員の厚生施設（運動場）となる。企業の経済的破綻と運命を共にする典型的例である。

（2） 門司鉄道局

大道良太局長（1916～1920在任）は外国通だが、1919年に庶務課長として赴任した吉田浩（後に門鉄局長として1924年12月～1929年6月在任）は、アメリカで見た野球の魅力にひかれ、門鉄野球部の強化を意図する。吉田の野球部に関する言説は見当たらないが、「きてき」¹¹⁶⁾への寄稿文にその一端が伺える。¹²⁾ 中で、「鉄道というゴツゴツしたような仕事をしていても、その人にも詩もあれば歌もある。和やかな情緒の閃きを、きてきを通じてみると、われわれ団体に潤いがみえ余裕が窺われるじゃないかね」と述べ、従業員一同の趣味的情操の必要性和重要性を説く。さらに、「戸外のスポーツによる剛健なる気風を練り、協力的活動の素地をつくる傍ら～中略～現代のモボ、モガ式の柔弱なものは絶対に排すべきで、どこまでも質実素朴なるものに終始すべきだ」と。吉田の野球部創設の主旨は、次の4点に集約される。¹³⁾ ①スポーツによる高潔なる品性の陶冶と鉄道従業員への普及。②門鉄三万人が規律整然として業務していることを社会に表示する。③勝敗においては必ず勝つという意気を養成する。④職場にあっては職務勉勵、模範的職員であること。これが、首脳部の野球を支える理念であり、企業体と共存できる野球の意義及びそれへの価値付与を意味する。換言すれば、門司鉄道局のスポーツ観の原点であり、純粋なアマチュアリズムを標榜し、門鉄倶楽部などのスポーツ活動によりこれを実現しようとする。特に、同倶楽部の中心的存在である野球のもつシンボル性に着目する。ここでいうシンボル性とは、選手の知名度やチーム名にみられるように人々に明確に理解できる記号的内容を意味する。1926年（大正15）の門鉄倶楽部事業報告¹⁴⁾の野球部対外試合戦績をみると、10カ月（3～12月）間に約30試合を消化している。その中には、大阪、東京、韓国（当時は朝鮮）などへの遠征が含まれている。これに要する諸経費は、主催者側の一部負担や国鉄利用により軽減されたが、日常的な練習に必要な用具などの年間経費を賄うには、相当の負担が伴う。¹⁵⁾ ここにゲームの有料化（入場料の徴収）をせざるを得ない内実がある。次に、野球部員の勤務条件に直接関係する試合や練習時間の確保にどのように対処したのであろうか。豊田一枝氏は、その点について次のようにいう。¹⁶⁾ 「当時の人事は、野球部員の配属先、採用について相当便宜を計ったのではないか。配属先は、営業関係の事務系に多く、その職場の上司が野球に理解のあるところを選んだ。職場の主任級、係長の外出許可を得て、午後3時頃から練習に

行く。遠征試合の場合は、特別の許可の形をとり（所属主任の許可）、周囲は黙認しているような雰囲気であった」と。しかし、このような選手制度に対して一部から内部批判が出てくる。国有鉄道において、選手制度は、スポーツマンシップを真に生かし得るか大いに疑問があり、選手制度の解消を提唱する。野球を例にあげ、「鉄道に採用される場合、野球選手であるという意味を多分に包含されての採用である。そのため、業務を習得する暇もないほど練習に専念する。その結果、業務未熟のため大学を出ながら掛の主務者にもなれない。選手のこのような境遇を知らず、ナインを犠牲にして芝居気分に陶醉してはいないか。鉄道は事業官庁であり売名の必要はない。採用した以上は、あくまで仕事を本位とするアマチュアとして育てるべきではないか。スポーツと業務を本末転倒するプロフェッショナルに近い選手制度はとるべきではない」と。¹⁷⁾外部からも練習時間についての次のような疑問が呈せられている。¹⁸⁾野球部の練習時間の量について、有名大学チームと同じくらいではないか。これに対して、それ程ではなく、各人の職務遂行が第一であると弁明している。毎日他の職員より早く事務を打ち切って練習しているのではないかという疑問には、なかなかそうはいかない。一同が揃うのは、週に何回かという程度で、世間で想像するほど練習はできないと回答している。それは、練習時間の確保のために「公用外出制度」¹⁷⁾を採用した八幡製鉄所や中島鑛業所にみられる制度的対応がなく、上司の許可により職務上の曖昧さを残しながら特別待遇による練習参加を意味する。ここに、外部的には、建前としての職務を強調し、一方では、野球のシンボル性に協力せざるを得ない野球関係者の矛盾が見え隠れするのである。

以上みてきたように、中島鑛業所野球部は筑豊地方の炭鉱に野球に対する関心を惹起し、戦後の炭鉱野球部創設に大きな影響を及ぼす。特記すべきは、戦前の米国大リーグ選抜チームとの試合を近隣住民に見せ、野球の醍醐味を満喫させた先見性である。

門司鉄道局野球部は、整備された専用球場は所有できなかったが、私鉄の九州電気軌道（現西日本鉄道）が管理する小倉市（現北九州市小倉北区）到津球場を本拠地にする。同球場は地理的にみて地域の中心部にあり、集客に便利で多くの野球ファンを獲得する。年間の消化試合も多く、創部当初に標榜したアマチュアリズムを遵守できず、しだいにエリートスポーツ集団に変貌する。野球部運営経費の大部分は、対外試合有料化による収益に依存することになる。結果的に金銭の授受を肯定するセミ・プロフェッショナルリズムへと転換を迫られる。戦後は、後援会を組織し経費の負担軽減をはかるが、プロ野球の復活と機を一にして門鉄野球部は優秀な選手を引き抜かれる。その理由の一つに選手の薄給があげられる。しかし、戦前の戦績である都市対抗優勝という輝かしい功績は、北九州地方の人々に対して、スポーツによる強烈的な帰属意識の醸成と企業の士気高揚への高い評価を認識させ、それが戦後へと継承されていく。戦後復興期の迅速な立ち上がりの一因をなすのであり、この伝統は生かされるのである。

3. 戦後復興期における企業硬式野球部

(1) 軟式野球の隆盛

前述のように、戦前からの伝統的スポーツイベントである製・門鉄定期戦の復活は、終戦後僅か3ヵ月を経過した時点で挙行された。同年8月以後、日本人は、自信を失い、茫然自失状態で「一億総懺悔」という虚脱感からの離脱ができない状況下での開催である。定期戦復活には次のような経緯がある。当時の八幡製鉄所次長、三鬼隆氏などを中心とする首脳部から、野球部の荒巻富造氏に「起業祭にはなにか明朗な行事をやりたいが、野球はできないか」という相談があり、同氏が門鉄と交渉し、ゴムマリ（軟球）で試合し、門鉄が勝った。¹⁹⁾ 野球関係者の熱意もさることながら、沈みきった市民にスポーツを提供しようとする首脳部に、よみがえる熱球を契機に企業再建に向かう情熱を感じ取ることができる。ここで当時の軟式野球の隆盛に言及しておかねばならない。

1946年4月19日、文部省は、大衆スポーツとしての軟式野球の普及のためスポンジボールを10,000ダース全国都道府県に配給している。²⁰⁾ この影響を受け全国的に軟式野球が盛んになる。人々は、自由に使える広場を求め集まった。主として学校の運動場が中心となったが、空き地であれば、その場に適したルールを創り、プレーを楽しむ。その場は全員が参加でき、応援に熱をあげる貴重なプレイ空間であり、出会いの場所となる。子供も大人も、このような場所でスポーツマンシップやフェアプレイを学んだ。戦前の一部にみられたハイカラな特権意識にもとずく浅薄なスポーツ観にかわって、参加者の全てが平等という価値規範が芽生えはじめる。しかし、軟式では野球のもつ醍醐味を十分に満足できないとする硬式への愛着を捨てきれない選手が存在も視野に入れる必要がある。野球用具の不足は、原料資材の統制下にあり、需要はあっても製造するための素材の配当が極端に少ないのが原因である。硬球、グローブ、スパイクシューズなどの皮革品は、特に原材料が厳しく統制されただけに入手は困難を極めた。第28回全国中等学校優勝野球大会は、8月15～21日、西宮球場で復活された。この大会の使用球の提供を要請されたM社には、投球練習専用ボールしかなく、打てば歪むと表示したボールを使用している。²¹⁾ 因みに、同大会は2年後の30回から学生改革に伴い全国高等学校野球選手権大会と改称する。

この頃、運動用具卸商各社が協力して機関紙を創刊する。1948年3月1日発行の日本運動具新報がそれである。記事は僅かに1面と2面の2頁に掲載されている程度であるが、1面の論叢の欄で、同紙の使命を概略次のようにいう。「スポーツ界興亡の裏付けは業界の任務である。～略～今日の需給の不円滑が、闇値を生じる原因となっているが、これが調整されれば、スポーツ界は大河の堰を切ったように、ものすごい勢いをもって普及し飛躍するという予想はだれにでもきるであろうし、関係者は一様にそれを待っている。本紙の使命は、諸方面の正確なニュースを提供しつつこれを奨励する」と。²²⁾ 同欄の意味するところは、業者の大同団結により、

運動用具の闇値横行を排除し、需給のアンバランスの解消のための強力なネットワーク形成である。同紙の第2号に「文化国家の建設に一役」と題し、概略次のようにいう。「この十数年は強力な統制にあえぐ苦難の年であった。終戦後、文化国家の一翼として、スポーツが重要な部門を占め、その用具をつくるわれわれ業者として今後重大な責任が感じられる。昭和13年の重要物資使用禁止令にあい、苦しい立場にたって打開策として、各資材別に工業組合をつくり、一方販売は、卸商、小売り別に組合をつくって、業界維持につとめたが、多くは軍需産業に転換された。昭和17年8月、全国運動具統制組合をつくり細々ながら続けてきた～略～幸いに、敗戦後まで、この組合を残し得たので、重要資材の申請もすぐできた。しかし、強力な統制下にあって使用材料は微々たる配給があつて、最近のスポーツ振興に照らせば、用具は益々不足状態である。皮革、ゴム、繊維は、数量が少なく統制はやむを得ないが、一日も早く自由製造、販売ができることを望む」と。²³⁾引用が長くなったが、日本の運動用具業界の戦時体制下の苦悩が率直に表現されている。スポーツの大衆化に不可欠な条件の一つに豊富な用器具の供給がある。終戦後の2年間は、原材料を旧軍隊の放出物資に頼り（例えば、迷彩用の帆布を利用した布製のグローブ）、限定された素材からでは製品も粗悪なものが多く出回った。速やかに統制を解除し、良品を自由に製造、販売が可能になるのを渴望している業界の内実を露呈しているのである。業界の状況から判断するに、スポンジボールの各県への配給が、軟式野球の振興や普及に果たした役割は大きい。まさに絶好のタイミングといえる。軟式の経験者は、やがて本格的な硬式野球への実践に転換し、そうでない人々には観戦することにより、より一層の関心を高めたに違いない。これは硬式野球観戦客の増大化を意味する。対象は、プロ野球も含まれるが、戦前からの伝統を継承する企業が所有するチームもあれば、終戦後に生まれた新興勢力の台頭チームの存在を見逃すことができない。例えば、下関市に新たに創部された大洋漁業や林兼産業が、北九州地方に新風を吹き込み、戦前からの輝かしい戦績を持つ伝統チームを脅かすことになる。

当時、軟式野球では満足できず、硬式野球の魅力が忘れられないままに練習を重ね最終的にはプロ選手となった引地信之氏からの聞き取りによると、当時の状況は概略次のようである。^{注8)} 1949年（昭和24）11月の千葉市での第4回国民体育大会軟式野球の中国地区代表として栄商事（下関市）が出場する。このチームの投手をつとめたが、結局、軟式野球の世界では物足らなさを感じ、1951年（昭和26）12月、岡山球場での大洋ホエールズの秋期キャンプにテスト生として参加する。栄商事からの出向という扱いでの参加だった。このキャンプで正式に採用された。その後、1953年（昭和28）には内野手として全試合に出場し、遊撃手守備成績1位（0.967）を獲得し、軟式からの転向にもかかわらず好成績をあげ注目される。大洋漁業傘下の系列の栄商事や市内の野球事情については以下のようなものである。栄商事軟式野球部の発足当時の1948年（昭和23）は、年間試合数が43、そのうち34勝をあげ、勝率80%と高い。この間、全国規模の大会に遠征し、選手にはほとんど仕事も与えていない。下関市では、他に林兼造船軟式野球部が活躍して

いた。大洋漁業は1946年（昭和21）8月に、硬式野球部を編成し、同年11月21日～24日（八幡大谷）での第1回選抜都市対抗九州大会に出場している。

ここで、同氏が話された内容で興味をひくのは、栄商事軟式野球部は、中堅企業の職場スポーツとしては極端に競技性を持っている点である。選手の扱いも大企業の硬式野球部なみである。同社は、大洋漁業系列の企業だが、結局、軟式野球で終わる。しかし、野球部員の待遇や練習時間の確保などは、大企業運動部なみの特別扱いを首脳部の公認の形で受けているのが特色である。再度、聞き取りの内容にふれてみよう。練習は通常は午後3時から東大和町の大洋球場を借りて存分にやれた。見物人はいなかったが、仕事は他の者にまかせ、熱心に練習した。当時は、水産漁業が経済的に潤っていたのであろう。他の社員より給料は良かった。試合出場は出張扱いで特別手当でもあった。練習に出るときも特に許可を得る必要もない職場の雰囲気もあって、遠慮なく退出し球場に行った。

このようなチームがある下関市は、軟式野球とはいえ、活況を呈していた。例えば、「みなと新聞」は、同社主催の軟式野球大会について概要次のような記事を掲載する。「この大会は水産関係団体を対象にしたもので、第1回は栄商事、第2回は日本漁網が優勝した。この両者は、市内のA級チームで別にリーグを持ち、1949年の第3回には、もはや出場していない。しかし、大和町の大洋球場には同社傘下の系列会社が20数チームも出場して6日間にわたって、みなと獅子旗の争奪をする」と。²⁴⁾

このような企業ぐるみの野球熱が地域住民にも波及し、関門海峡を境とする対岸の北九州各市の強豪チームに対し、新興勢力としての対抗意識が盛り上がってきたのではないだろうか。野球を媒体とする対抗意識が、関東や関西地方にみられない戦後の迅速な立ち上がりの原動力になるのである。その中心的存在が、アマチュアとして的大洋漁業、林兼造船硬式野球部であるといえよう。北九州地方の企業間における軟式野球は、おそらく下関市と同様であろう。だが、八幡市の大谷球場は戦前からの伝統を継承し、同球場を本拠地とする八幡製鉄所や専用球場を持たない好敵手の門司鉄道局が各地からの遠征チームと対戦する戦後復興期での唯一のプレーゾーンでもあった。シーズンオフのプロ野球や東京6大学チームも遠征してくる。九州地方が晩秋期でも、かなり暖かいし、集客力がある。加えて遠征チームには、経済的な負担をかけないなどの魅力があり、同球場は、常に使用されていた。観客は高い技術やチームカラーの違いなどを通して、地元チームへの熱烈な応援へと傾斜していく。マスコミも自らが主催し、選抜都市対抗という名称のもとにレベルの高いチームを招待し、新聞の販売部数の拡大を意図する。地方の野球雑誌「西日本球界」は、このような時期に発刊される。²⁵⁾ これらを総合すると、北九州地方の範囲は、企業の硬式野球に関するかぎり、下関市や筑豊地方をも含む広がりを見せる。

（2）企業硬式野球部の発展

1946年（昭和21）年8月、下関市にアマチュアとして的大洋漁業硬式野球部が発足する。市内

大和町に大洋球場が新設され、開場初戦は対明治大学であった。

中部兼市前社長などから硬式への転向を指示され、以後、戸倉勝城、松井淳、江藤正、寺島公、長富政武、壺内司、芦野真也、河内卓司、森雅功、矢野純一、矢野鴻次の諸氏を選手として入団させている。1946年(昭和21)年8月には、第17回都市対抗大会は復活する。前記の補強は、翌年の第18回都市対抗へむけてのものである。同18回大会では全大阪に2回戦で敗退する。しかし、同年9月25日～10月1日の第2回選抜都市対抗九州大会で優勝する。この選抜都市対抗は、毎日新聞西部本社の関係者の提唱により1946年(昭和21)11月21日、八幡大谷球場で第1回が開催された。本大会の主催者である毎日新聞は、都市対抗の地方版と位置づけ協力を惜しまなかった。実に絶好のタイミングを生かしたといえよう。その理由は、北九州地方を中心とし、企業の硬式野球部は新旧のチーム共に優秀な選手を採用し、そのレベルは全国的にみても最高の水準を満たしていた。そのため招待するのは、都市対抗の優勝チームと、その年の強豪チームに限定されていた。第1回は、地元の八幡製鉄所が優勝している。前記の第2回選抜都市対抗では、地元の大洋漁業が、同年8月の全国大会で優勝した大日本土木(岐阜市)と準決勝で延長17回を戦い、引き分けとなる。再試合でこれを破り、決勝で星野組(別府市)をくだし優勝している。1948年には、第3回選抜都市対抗九州大会に出場し連覇する。しかし、本来の目標である全国大会では不振であり、翌年の第20回大会では1回戦で全藤倉(東京都)に敗退している。このように大洋漁業は全国大会では戦績不振だが、地元では強いという傾向を脱することができず、1950年に解散し、現有のアマチュア球団とは全く無関係のプロ野球チームを結成する。アマチュアとして的大洋漁業は、まさに彗星のように現れ消えたチームである。その事情について、野球雑誌の西日本球界は概略次のようにいう。²⁵⁾ 当時の下関市には、軟式野球のA級チームが大洋漁業以外に6チームもあった。しかし、その多くは経費面の課題が克服できず硬式野球部に転換できなかった。具体的にあげると、東行産業は戸倉勝城選手、建設会社の日産土木は、高田常夫監督が中心であり、関鉄クラブは、中学卒の選手を主体とした下関駅の車掌区の同好の士の集まりである。林兼造船は、中部利三郎氏が長兄の兼市氏との野球における対抗意識に燃えるチームで有村家斉投手を擁している。日本漁網は田村博氏を監督にし、下関商業OB選手で固め、三菱造船は、終戦の年の10月末、社内大会を機に硬式に転じて、会社のシンボルとしての野球をめざす。結局生き残ったのは、大洋漁業と林兼産業である。上記のそれ以外のチームは軟式野球を継続する。しかし、大学出身の野球選手を好条件の待遇で集め、大洋漁業の中部兼市氏が主張する、魚を日頃ひいきにしてくれる一般大衆のお客さんへのご恩返しという球団結成意図に対し、次のような批判も出てくる。その一部を抜粋すると、「人気絶頂といえる今日野球界を検討してみると何かしら混乱を呈しつつ有る様子を見逃しえないのは何故であろうか。理由の一つにアマチュアとプロフェッショナルとの問題が大きな原因である。アマ・プロ問題は今までずいぶんとりあげられたがまだ一つとして決定的な具体案がない。現状は依然としてプロとアマとの試合が公然と行われており、何ら疑義を持たれない。

プロとアマの区別を確立して実業団チームの中途半端なものには、はっきりした進み方を示すべき時期がきたのではないだろうか。」と。²⁶⁾確かに、実業団野球の内実は、不透明な面が多く、特に部の運営経費の内容が把握できない難しさがある。例えば、ある座談会の席上で、別府市の星野組の年間必要経費についての質問に、人件費を含めると200～250万円と答えている。²⁷⁾門司鉄道局野球部は、1918年（大正7）に結成された関門地方では最も伝統があるチームだが、戦後は、絶えず所属選手の引き抜きが繰り返され衰退していく。その原因は、運営費の不足と選手の給料が格段に低いための大量退部である。1947年当時の同部の収支について次のような記事がある。

収入は、ギャランティー（有料試合出場による配当金）が年間70,000万円、鉄道本省から補助金15,000円、篤志家の寄付10,000円、合計95,000円。この中から部員20名の用具費、合宿費を賄うのだから所帯は全く火の車である。支出は、ボール1個300円、ユニフォームが1,500円、バットが1本180円、ストッキング500円、スパイク1,500円、年間消費するボールが約900個で約300,000万円、スパイク1人3足は必要で4,500円、バットが年間100本で18,000円で最低限でも約300,000円以上となる。では赤字の対策をどうしているか。結局、後援会の組織化によるしかない。門鉄の各部課から2名の委員を選出し、全職員を会員とする後援会が発足することになると。²⁸⁾前記の星野組と比較すると、その格差の大きさに驚く。やはり、大洋漁業の実業団野球界からの撤退には、アマチュアとしての球団経営に懸念があったのではないか。前出の中部利三郎氏は、それについて次のように言う。「現在の状態だと社会人野球が経済的にやれるかどうか一番心配している。硬球の野球は高等学校とプロで使い、社会人野球は軟球に代わるのではないか。世界的に日本の社会人野球が伍していけるようになれば見方は別でしょうが」と。²⁹⁾さらに続けて、「日本だけを考えた場合は、社会人野球は経済的な関係もあり、また、プロ野球との関係上、このプロ野球との関係ということはプロの選手を現在社会人野球が養成している。そして、ようやくものになったら引き抜いていくという状態ですが、これでは社会人野球の安定性がないのではないか」とも。³⁰⁾これに対し、毎日新聞西部本社運動部長、井口新次郎氏は、「プロ攻勢が激化し、将来は都市対抗大会が、このままでは次第に衰微していく懸念をもっているが、なんとか打開したいと占領軍のマーカット少将と懇談し、ノンプロ野球世界選手権の開催がきまり、アマチュアにとって最高の目的ができた。都市対抗がプロにおされていても、世界的な目標が設定されたという意味で今後もある程度は盛んになるのではないかと」反論する。³¹⁾また、大洋漁業の大西正夫氏は、「米国では日本でやっているような純粋な社会人野球を見たことがない。現在の日本の社会人野球と称しているのは米国でいうセミプロというのに相当するのではないか。セミプロというのは一定の職業をもちながらリーグ戦をやっている。ある職業をもつと同時に野球選手もやる。その形態に似ていると思う。米国では、硬球の社会人野球はほとんど見ませんが、特殊な百貨店などがやっているようだ。日本では、新聞社などが、これほど宣伝して社会人野球を続けているのだから今後も経済面の許す範囲内で

生まれるのではないか」という。³²⁾ 星野組の西本幸雄選手は、「ノンプロ野球世界選手権大会を日本でやることができたならば、一つの目標になって、選手にも励みがでてる。会社側もわれわれに対して経済的に苦しい中を随分無理して維持しているのが現状である」と選手側の立場から発言している。³³⁾ この座談会での諸発言の意味するところは、当時の社会人野球の存在意義が、非常に中途半端な性格の上に成立しており、プロでもなければアマチュアに徹しているのでもない。そこに成立基盤としての脆弱性がありチーム存続の不安定性が常に隠されている現状の率直な分析である。当時、企業に所属する選手にとってみれば外部からの好条件提示に動揺し、道義的信義を問われながらもプロへと移籍するのは当然であろう。前出のノンプロ野球世界選手権大会は、1952年（昭和27）9月12～17日、後楽園・甲子園両球場で第2回ノンプロ野球両半球選手権という名称で開催され、日本代表は全鐘紡が出場する。しかし、期待されたほどの反響はなく、1954年（昭和29）12月18～26日、マニラリサール球場での第1回アジア野球選手権大会での八幡製鉄出場は社会人野球界に大きな影響を与える。このような国際化は、単に企業の宣伝に利用される野球部としての存在から、スポーツを通して国際親善という役割を果たせるスポーツマンとしての存在感が発揮できる端緒となる。必ずしもプロになる必要もなく、現役を引退しても所属企業の一員として勤務し別の人生を歩くこともできる。戦後50年を経過した今日においても、プロ野球への転身は、社会人・大学・高校出身者にとって大きな分岐点であり、リスクも大きい。特に、社会人野球では、将来的保証が約束され、引退後は通常の業務への復帰が可能な条件を提示して欲しいと要求する関係者は少なくない。前出の座談会での諸発言は、社会人野球界の将来性についての先見性に富むものであり、戦後復興期において、すでにそれを予見しており興味深いものがある。1950年（昭和25）大洋漁業はプロ野球界に進出し、大洋ホエールズを結成する。その後は、社会人野球界と断絶する。また、都市対抗の九州ミニ版として、多くのファンを獲得した八幡市大谷球場での選抜都市対抗は、いわば、終戦直後の復興ブームに乗った建設会社などの新興野球チームの解散によって、一気にその人気を喪失する。例えば、別府市の星野組は、もともと佐世保市が本拠地で、終戦後、進駐軍キャンプ建設の請負で急成長し、全国的な知名度を得るため野球チームを所有する。大分市の植良組も同様である。この両チームが硬式野球部を結成し得たのは、経営者側の潤沢な経済的援助があり、選手集めに好条件を提示できたからである。しかし、星野組は、1949年の第20回全国都市対抗で優勝し、翌年には解散し、跡形もないのである。

1948年の決勝は西日本鉄道と星野組の対戦となり、この試合には、荒巻淳投手が出場せず（右鎖骨骨折）、西鉄が優勝する。1947年は、同大会に八幡製鉄と星野組が出場し好成績をあげている。地元の旧勢力と新興チームが拮抗する戦後復興期に、北九州地方の多くの野球ファンを魅了する。特に、大谷球場での選抜都市対抗大会では、選手の実像を目にすることが可能であり、一度は見たいという観客で超満員であった。このような全国的に例をみない高度の野球技術を満喫できた大谷球場での盛況は、日本のアマチュア野球史に残るとともに、地域のスポー

ツ振興に寄与することに成功したと評価できる。

さて、当時の進駐軍（米国を主体とする連合軍）との野球における関係はどの程度であろうか。米国進駐軍との親善試合が行われている点からみても、日本人のスポーツに対する認識向上には協力的であったといえるようである。その一つの事例が、引地氏のスクラップに保存されている。³⁴⁾それは、1950年（昭和25）4月29日は門司球場、同30日は下関大洋球場で開催された米軍小倉第24師団のブルドック対オール下関との2連戦である。これに対し、門司市は次のような謝意を表わしている。「大衆に親しみやすい野球を通じて日米現地人の交歓を図ろうとする米軍24師団ブルドック軍の好意ある申し入れに対して～略～ブ軍歓迎と好意に報いるため花束とビールを贈り市民の微意を表す」と。³⁵⁾

この両試合は、無料公開であり、対戦するオール下関は、解散した大洋漁業の元選手や市内の有力選手で構成した混成チームである。両試合に出場した引地氏によれば、試合の内容は、レクリエーション的で真剣なものではなく、観衆は約5,000人で満員の盛況であったという。³⁶⁾現段階では、この程度のもので、師団から選抜された野球の経験者がチームを編成し、対外試合の相手として地元のアマチュアチームを選んだに過ぎないようである。戦後復興期の進駐軍との接触は今後の課題の一つである。

4. まとめにかえて

戦前の北九州地方には、すでに大企業の中に、高度の技術を持つ野球選手を意図的に集め、会社のシンボルとして特別扱い、さしたる業務も与えられない競技集団は存在していた。戦後も、その傾向は継続したが、プロリーグの2リーグ分立（1949年11月26日）を日本野球連盟が公表した後から企業の硬式野球部の優秀な選手が次々とプロ野球に引き抜かれていく。この現象は、アマチュアを標榜する企業の硬式野球部の体質を露呈することになる。これが契機となって、アマ野球界の内実が極めて曖昧な不透明性を有するとして、それまで持っていた純粋なアマチュアリズムに対する不信感や尊敬の念を失い始める。今回、プランゲ文庫の中から新資料として収集した「新大洋」や「青年時報」及び「スポーツマガジン」にその事が反映されている。大岡虎雄氏（当時の八幡製鉄野球部監督）は、前記の青年時報に掲載の引退の弁明で、「先般起きました大谷での一件、私は製鉄で培われた意気と熱をもって、フェアプレーを守るため私の野球を投げ捨てたのであります。～略～私はこの度の引退に、全く野球を断念するの強固なる意志を持ってきましたが、後進への助言の万全を期する意味において、できるを幸いいま一歩深めるため出ていく決意を致しました」と晩年からのプロ入りの決意にふれている。³⁷⁾これは、試合中の相手のラフプレーに対応した暴力事件（1948年5月29日、対西鉄戦）の責任をとる形での退部を意味する。翌年、プロ入りし活躍する。前出の「スポーツマガジン」は自らをスポー

ツ社同人と称し、有志により地元の野球に関するニュースを掲載している。その巻頭言は次のようにいう。「都市対抗では西鉄が優勝し、高校選手権では小倉高校が2連勝するし、鉄道野球大会では志免鉱業、炭鉱軟式野球優勝の日鉄嘉穂を加えれば全国野球のペナントを4本も福岡県に迎えたわけである。～略～いまや野球王国である。しかし、本当の野球王国なら技術だけでなしに、道義的にも本当の野球王国であってほしい。以下略」と。³⁸⁾戦後復興期の野球隆盛の中で、スポーツ社同人らは、雑誌創刊により適切な情報を提供し、スポーツへの真摯な態度を涵養しようと試みているかのようである。以上の考察から復興期の企業硬式野球部を支えたのは、強力な首脳部によるリーダーシップ、選手の努力、人々の自信を回復するためのスポーツ奨励、スポーツ用品業界の支援、地元のマスコミやスポーツ雑誌による情報網拡大などの諸要因により構築されたといえる。しかも、戦後復興期の迅速な立ち上がりは、一時中断された戦前のスポーツ文化を継承し、空白期を経過することなく、一気に開花させた関係者の情熱による結晶である。

(本論文の資料の収集及び聞き取り調査は、仲里、堀内が、基本構想は仲里、古園井が担当した。)

注及び引用文献

1) 仲里清他、北九州地方における企業内スポーツの研究、九州共立大学経済学部紀要第76号、PP17-31、1999. 3.

2) 岸野雄三編、近代体育スポーツ年表、P164、1999. 4.

3) 日本社会人野球協会九州連盟、同野球史、P38、1984. 5.

4) 麓三郎、三菱飯塚炭鉱史、P40、1961.

注1) 長野県飯田市出身、1920年早稲田大学卒、1930年、早大野球部監督、後に読売新聞社運動部長、1934年東京巨人軍専務取締役、1936年の日本職業野球連盟結成に尽力。

5) 市岡忠男、野球界、「運動王国九州」、12-6、P22、1922.

6) 同上、「学校チームと実業団」、1-8、P16、1921.

7) 前掲、「運動王国九州」、P22.

8) 菊 幸一他、体育学研究、37-1、PP 8-9、1992.

9) 高鍋 健市、野球界、「中島鑛業所野球部合宿訪問記」、13-12、PP47-48、1923.

注2) 1920年、大阪毎日新聞社が創部した実業団野球界の強豪チーム。同社新聞の販売数拡大のため、各地の新聞販売店に依頼されて遠征し、地元チームとの対戦しながらその目的を果たした。セミプロ球団と称されたが、1929年解散する。

10) 九州大学石炭研究資料センター、石炭研究叢書6、「中島徳松翁伝上巻」、P52、1985.

11) 同上、P52.

注3) 1922年11月、来日したハーバード・ハンター引率の米大リーグ選抜チーム。

注4) 1994年2月15日、直方市感田423の自宅にて木原優氏からの聞き取りによる。

注5) 1921年結成された最初のプロ野球チーム。東京芝浦球場を本拠地とし。河野安通志を中心とする野球関

係者により設立。1923年の関東大震災後、小林 一三氏により宝塚協会と解消し存続される。通算戦績は、322勝131敗、14分である。

注6) 門司鉄道局の局内雑誌として1919年6月創刊。スポーツ記事、旅行記など趣味に関するものが掲載されている。1941年12月廃刊したが790号まで発刊されている。

12) 門鉄庶務部、きてき、「10周年記念号」、10-14, PP 2-4, 1928.

13) 同上, 12-29, P 9, 1930.

14) 同上, 9-21, 大正15年度門鉄倶楽部事業報告, PP15-17, 1927, 会長(吉田 浩局長), 以下若干の評議員, 経理, 陸上, 水上, 野球, 庭球(硬・軟), 武術, 棋, 音曲, 講演の各部で組織。15年度会員数約1,500人。収入7,380.67銭, 支出6,119.63銭, 繰越4,710.59銭, 合計10,830.22銭と報告されている。

大枠は提示されているが各部への配分額は示されていない。当時の管内職員は約30,000人, 倶楽部構成員は局内有志であろう。

15) 例えば、「打撃練習用の移動式ケージ(cage)は1台400円で注文した。野球用具の購入はすべてマネージャーを通した。バットは20本位用意し選んだ。支払いは一括して運動具店にしたので選手の負担は一切なかった」。1990年, 八幡東区の前川重夫氏(同所野球部選手, 後にマネージャー)の自宅にて聞き取り。

16) 豊田一枝氏は1931年入社, 関西大卒, 1936年第10回全国都市対抗大会優勝時の二塁手, 後に同部監督。内容については1990年3月4日, 山口市の自宅で聞き取り。

17) 前掲, きてき, 16-9, PP31-33, 1934.

18) 前掲, 野球界, 「全国実業野球団総まくり」, 18-14, P46, 1928.

注7) 上司の許可を得て, 所外に一定の時間外出し, 公の用件を果たすことを意味する。許可証が必要である。八幡製鉄所が採用している。

19) 市政タイムス社, 「鉄人の譜」, P63, 1954.

20) 前掲, 近代体育スポーツ年表, P184.

21) 美津濃株式会社, 「スポーツは陸から海から大空へ」, P53, 1973.

22) 日本運動具新報, 創刊号, 1948. 3. 1.

23) 同上, 第2号, 1948. 3. 15.

注8) 引地信之氏(1930~1999)は, 下関商業を卒業し, 栄商事を経て, 1953年プロの大洋ホエールズに入団。1959年から同球団にコーチとして残留, 1989年退職。

24) みなと新聞社, みなと新聞, 1949. 10. 21付。

注9) プランゲ文庫に保管されているのは, 1947年2月の1号から翌年の10月の17号までである。月刊3,000部で現在では閲覧が困難と考えられる。掲載記事は大洋漁業や北九州との競合に関するものが多く, 戦後復興期の関門野球界の空白部分を埋めるに十分である。

25) 新関門社, 西日本球界, 「大洋をめぐる6球団」, PP6-7, 1947. 2.

26) 大洋漁業株式会社, 新大洋, 第5号, 1948. 3. 25.

27) 同上, 創刊2周年記念号, P28, 1949.

28) 前掲, 西日本球界, 第4号, P 6, 1947. 8. 20.

29) 前掲, 新大洋創刊2周年記念号, P26, 1949. 8. 10.

30) 同上, P26.

31) 同上, P26.

32) 同上, P27.

33) 同上, P26.

34) 引地信之氏の新聞の切り抜き記事による。

35) 関門北九州新聞社, 「関門北九州」1950. 10. 30日付。

- 36) 引地信之氏からの聞き取り，1998年12月21日，下関市の自宅.
- 37) 八幡製鉄労組職組青年部，大岡虎雄監督，青年時報「思い出によせて」，13号，PP64-65，1948. 10.
- 38) 株式会社スポーツ社（下関市），スポーツマガジン，号数は記入なし，1948. 10. 10.